＜塩川正十郎対談『呉清源　極みの棋譜』＞

Ｈ１９年１１月２４日（土）（午後４時４０分～５時２０分）

司会：『呉清源　極みの棋譜』の公開記念企画としまして、元財務大臣で関西棋院理事長の塩川正十郎先生に映画『呉清源　極みの棋譜』の魅力について語っていただこうと思います。まず、ご紹介させていただく前に、本日の司会でありトークショーを盛りあげていただく、弁護士で映画評論家でもあります坂和章平様をご紹介させていただきたいと思います。坂和様は今年１０月１０日に北京電影学院で、同学院の第１期生であり、現在同学院で教鞭をとっておられる、本作品の田壮壮（ティエン・チュアンチュアン）監督とお会いになられました縁で、今回のトークショーの司会をお願いすることになりました。お２人がツーショットで写っている写真もございます。ロビーにも飾っておきますので是非ご覧ください。それでは早速お呼びいたします。坂和様、ご紹介させていただきます。どうぞ皆さん、拍手でお迎えください。

坂和登壇、舞台上の席に着席

司会：続きまして、元財務大臣で関西棋院理事長であります塩川正十郎先生をご紹介させていただきます。皆さん、拍手でお迎えください。では、早速始めさせていただきます。

塩川正十郎登壇、舞台上の席に着席

坂和章平：それでは、『呉清源』の映画を観終った後、塩川正十郎先生をお招きしてのトークショーを始めたいと思います。かなり静かな、重たい映画だったと思いますが、皆さん、いかがだったでしょうか。私はこの映画を観たのは２回目ですが、今日も非常に感激しました。塩川先生は、小泉内閣の時代に塩爺（しおじい）と呼ばれて皆さんから大きな応援をいただいたと思いますが、今日は塩爺という立場ではなく、関西棋院の理事長という立場で来ていただいております。まず先生、既に何回か鑑賞されたと思いますが、今日あらためてこの映画を観て、先生としては、この映画最大の特徴を先生としてはどのようにお考えでしょうか。

塩川正十郎：私は今日で２回目です。１回目は８月の封切りの時に東京で観ました。私は関西棋院の理事長をやっておりますが、囲碁にはそんなに詳しくない。少したしなむ程度でございます。戦争に敗れて復員し、米軍の捕虜収容所に収容されていた時に、私の下士官が教えてくれたことが縁で、こういうことになっています。囲碁は日本の文化に深く根ざしたものですし、非常に日本人的な知的ゲームです。そこで、できるだけ家庭に広め、家族の団欒に囲碁に馴染んでいただけるように、そういう気持で関西棋院の理事長を引き受けました。囲碁界からみれば、僭越な奴が出てきおったなということだろうと思いますが、しばらくは社会教育を拡大するという意味でやりたいと思っております。そういう立場で、東京でもこの映画の試写会にも招待してもらったのだと思います。この映画は私が考えているイメージと非常によく合っていると思っております。その１つは、日本の文化の中に根付いている形というものを非常に大切にしていることです。

坂和：様式ですね。

塩川：それと、囲碁の試合をするということは、その当時やっぱり厳粛なものだったんですね。そのため、礼儀というものがしっかりと囲碁の勝負の中に展開している。現在、囲碁についての反省といいましょうか、考えるべき点が提示されていると思います。

坂和：映画の終わりの方で、呉清源さんが引退試合を行う前に木谷実さんとお話をされていましたよね。大竹君とか林（リン）君とか若い人が育ってきていると。この林海峰さんや大竹英雄さんという人は木谷道場で修行していた男の子たちなんですね。囲碁のルールを子どもたちに教えていく、形も礼儀も教えていく、そして囲碁の勝負の厳しさも教えていく。そういうことは非常に大切だと思います。そこらあたりについて、もう少し話していただけますか。年配の方はたぶん同じ思いだと思います。若い人には、お前何を言っているんだという人もいるかもしれませんが、そこらあたりをもう少しお願いします。

塩川：先ほど申したように、囲碁を家庭に普及させたいと思います。私の親父がそうでしたね。私の親父は姉には獅子舞を教えたり・・・。私は男の兄弟が４人おりました。そこで、私の弟には、晩ご飯がすんだら「おい、ちょっと持ってこい」と言って、碁か将棋を持ってこさせて弟相手にやってたんですね。私の弟は碁が強かったんです。親父が負かされると、親父は腹を立ててバーンとしばいたけどね・・・。しかし、そういうことで一家は碁と将棋を中心として非常に団欒があったと思っています。ところが今の家庭をみたら、経済とか社会の状況が変わったこともあるけれど、親子がバラバラで食事をしていますね。親子の団欒で何が中心かというと、テレビを見ていることくらいです。しかし、それでは親子の情がこもった対話というものがないだろう。そこに現代の殺伐とした社会風潮ができておるんじゃないかなという悲しみをもっております。だから私は、できるだけ囲碁の普及のために子供を相手にすることを呼びかけております。それと同時に婦人に呼びかけています。関西棋院の中には橋本宇太郎先生がつくられた伝統というものがあります。大阪は地元の人と密着している市民的なところが、東京の日本棋院とはちょっと違う。日本棋院はプロを中心としてやっています。しかし、関西棋院はアマチュアと実業界の人が中心だから、そういう点が非常に良いと思います。

坂和：ちなみに、橋本宇太郎先生が関西棋院の最初の理事長さんですよね。呉清源先生の最後の引退試合の時、初手にぼんと天元に打った棋士です。その関西棋院の理事長を塩川先生が継がれたわけですが、塩川先生のインターネットを見ますと、「免状は６段をもらってるけれど、わしはヘボ碁や」とご謙遜なされています。しかし先生には、関西棋院の理事長という立場で、今言われたように、広く子供や女性の方に囲碁を広めてほしいなと思います。ちなみに、今日お見えの皆さんはほとんどの方が呉清源という棋士をご存知だろうと思いますが、若い人は多分全然知らない。逆に若い人が知っている囲碁の話といえば、『ヒカルの碁』というコミックですね。これは、先生ご存知でしょうか？

塩川：ああ、知ってます。

坂和：囲碁に親しみをもつという意味では、子どもたちをターゲットにしたそういうコミックであってもいいと思うんです。いろいろな形で囲碁を広めていってもらいたいと思います。

塩川：五目並べというのがありますが、あれに満足しないで結局本格的な囲碁に進んでいきますよ。碁石を打つということは、私は相手があるからいいと思うんです。今は非常に水臭い世の中になってきています。たとえば、パチンコは一人でにやにや笑いながらやっている。社交性、協調性、人間のつながりというものがないですね。最近またインターネット、携帯電話も一人でこもっているでしょ。ですから、やっぱり社会性のあるものが是非必要だと思います。そういう意味において、碁も麻雀もいいですよ。私は小さい時は将棋やから、親父がね。

坂和：私も中学生の時は将棋に凝ってました。東京に出て将棋指しになるんやと言って親を困らせたことがあったくらいです。将棋の方は、一手一手の重みが激しいというか厳しい。しかし、囲碁の方はもっとゆったりと流れていくので、非常に高尚な知的ゲームだと言われています。

塩川：構想力というのは、将来どういう風に打っていこうかという楽しみがありますね。将棋は一発勝負で決まってくるのが何かきついですね。碁はその点、自分である程度構想して、そのイメージのところにもっていこうとするのがひとつの楽しみですね。

坂和：次に、呉清源さんが日本に来たのは１９２８年ですが、彼は１９１４年の生まれなんですね。そして今も９０何歳でまだお元気だということです。ちなみに、塩爺は１９２１年生まれですね。

塩川：１９２１年です。だから７つ違いですね。呉清源先生が元気でやっておられるということなんで安心しています。

坂和：私は今５８歳で髪は白いけど、まだ団塊の世代です（笑）。私の目で呉清源の歩みをみると、こんなことがあったんか、こんなこと知らんかったなあと思ったことがたくさんあります。そのひとつが原爆が落ちた時に広島で対局があったことです。「原爆下の対局」ということで有名なお話なんですね。もうひとつ私が知らなかったのが、今日はじめて映画を観てパンフレットとかを読んでいなければちょっとわかりにくいかもしれませんが、「璽宇（じう）」です。まあ璽宇教と言ってますが・・・。

塩川：璽光尊（じこうそん）ですね。

坂和：私は映画を観て自分で勉強する中でやっとわかったんですが、先生はああいうお話は・・・？

塩川：璽光尊はひとつのブームでした。それから警察が踏みこんできた時、階段でバーッと身体を張って止めようとしている相撲取りいますやん。あれが双葉山ですね。

坂和：そう、あれが昭和の名横綱の双葉山なんですね。

塩川：私は呉清源が璽宇に帰依していたことも知ってました。それから、女優さんで名前をちょっと思い出せないですが、有名な人も入っていました。この宗教は、終戦直後の虚脱状態の中でひとつの光をパッと当てたという印象がありましたね。私はホンモノだとは思ってなかった。しかし、何か頼るものが欲しかったというのが一般の風潮じゃなかったかと思いますね。

坂和：呉清源が璽宇の教えに入っていって離れていくまでの期間は４年くらいですが、映画ではその状況がわりと詳しく描かれていました。そんな実態を全然知らない人にはへーと思う話ですね。

塩川：深刻な話が多いし、物語自体としてはわりと長いと思うんですね。それを全部映画のスチールで覆うのは大変なことだと思う。ポッ、ポッ、ポッとスチールが出てくるんですね。巧妙に話がつながっているというのが私の印象です。そこで、この映画の監督の田壮壮という方はなかなか大した監督だと思いましたね。時代考証が本当に正確に出ていますね。あの戦争中の家とかトラックなんかもそのまま出しているんですね。非常によく映画にできている。しかも、金をかけんと非常にすばらしい映画をつくっていますな。キンキンギラギラ、あまり金をかけるんじゃなく、こういう精神的なものを描いた映画がもっと出てきてほしい。そうすればやっぱり青少年に対する社会教育になると思います。映画界もそういう心をもってほしい。そして安く観られるようにしてくれればいいじゃないですかね（笑）。

坂和：今監督のお話が出ましたので、ちょっと皆さんにご紹介したいと思います。田壮壮監督は１９５２年の生まれです。私は１９４９年生まれですから３つほど下で、彼はまだ５５歳くらいですね。中国では、張藝謀（チャン・イーモウ）監督と陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『黄色い大地』や『紅いコーリャン』によって中国ヌーベルバーグという映画が１９８０年代後半に始まったわけですが、田壮壮監督は北京電影学院を第１期生として卒業した陳凱歌、張藝謀なんかと同期生なんですね。先生、ご存知でしょうか？田壮壮監督のお母さんが女優さんで、その女優さんがちょうど先生と同じ１９２１年生まれなんです。田壮壮監督のお母さんが塩爺と同じ年の生まれなんです。日本は１９４５年の敗戦から今日まで６２年間ずっと平和でやってきましたが、中国では文化大革命というどえらい時代があったんですね。田壮壮のお父さんも俳優でしたが、それで命を落としてしまった。お母さんも俳優だったけれど、毛沢東の奥さんである同じ女優の江青さんからえらい迫害を受けて女優生命を奪われてしまった。そういう時代状況の中で彼は小学、中学時代を育って非常に苦労した。今彼は５５歳くらいですが、そういう意味で、ものすごい人生の年輪が刻まれていると私は思うんですね。こういう彼の体験が、映画の表現力の深みとか厚みとして出ていると思うんです。

塩川：映画全体に通じるメンタルがしっかりしてますね。特に観てまして、瀬越さんと木谷さんに出てますね、ここなんか非常に人間性をきちっと出していて、全体を通じて現在の我々が反省するところがたくさんある。人間の深みというか重みもついてますね。

坂和：今日わざわざこの時間に集まってこれだけ席を満杯にしてくれている方はそういう意識をもっていると思います。日本では、今昭和を懐かしむ『ＡＬＷＡＹＳ　三丁目の夕日』の第１作目、第２作目が大ヒットしています。もちろんこれはこれですばらしい映画ですが、今の日本人は楽しく昔を思い出すというので、多くの人たちがそちらに流れていると思います。しかし他方では、今日の映画のように、ある意味では七面倒くさい、重たい映画をどうやって日本に広めていくのかが大切だと思います。そういう観点から、皆さん方の子供さんやお孫さんで囲碁をやってる方いらっしゃいますか？ちょっと手を挙げていただけますか？俺の息子、娘、孫は囲碁をやってるぜという人はいますか？ああ、やっぱり少ないですね。まあ、今日の塩爺の話を契機として是非広めてほしいなと思います。

塩川：今教育問題がいろいろ言われていますね。教育というと学校の問題が中心になっていますが、社会教育そのものが非常に大事だと思いますね。各地の教育委員会等がお世話をして、各地の公民館等で囲碁の講習会とかそういうのをやってくれたらいいなと思います。私もそう思いながら、自分の身体がなかなか動かない。忙しいというか、動かない。何か余裕をつくって、そういう運動を一度してみたいなあと思っています。地域、地域に囲碁の強い人はいますよ。誰も知らんけれども、あの人はしっかり打つんだという人が。そういう人に頼んで公民館なんかを開放して囲碁を広めていけば、だいぶ違ってくると思います。

坂和：今先生からいろいろと提案がなされていますので、是非検討してもらいたいと思います。ちょっと、今の政治状況を考えてみますと、塩川先生は小泉改革の５年半の間、財務大臣という立場でいろいろ支えた。支えたんじゃない、引っ張ってこられたんですよね。その後、残念ながら安倍政権が１年で終わってしまいました。そこで教育改革、教育再生という話がちょっとワケがわからなくなっている。そういう中、つい先日は福田総理と小沢民主党代表の間で大連立という話が出たわけです。キナ臭い話も含めていろいろあると思います。囲碁の世界でも日本人棋士の力がちょっと低下して、中国、韓国の棋士たちが非常に大きな力を持ってきているという状況です。そこで囲碁の世界の活性化、それに政治の世界を含めて、ウルトラＣ、必殺ワザ、囲碁の世界や政治の世界で何かこういうことやったらどうやねん、というものが何かあるでしょうか。

塩川：歴史的に専門家の先生にいろいろ聞きましたら、囲碁というのは朝鮮に基盤があるじゃないかと言われました。いろんな栄枯盛衰ありましたが、徳川家康が非常に囲碁を奨励したという歴史的なことがあるんですね。もちろん秀吉も信長も奨励していた。武家では囲碁がようやられとったということがある。そういう昔の物語もあるが、近現代の囲碁の棋士では呉清源先生がおられるし、関西棋院の創立者である橋本先生がおられる。そういう人をつかまえて、ひとつ誰でも親しみやすい小説的な物語風なものをつくってはどうだろうか。それで親しみをもつということをひとつの切り口として活用できるんじゃないかと思うんです。私も映画を観て、関西棋院の職員に橋本先生の物語が何とかならんやろうかと言っておるんですが、そうですなと言うだけで事務的に終わってしまっています（笑）。

坂和：将棋の阪田三吉さんのお話は日本人はほとんど知っていると思います。しかし今言われたように、囲碁の世界が映画で描かれたのは非常に少ないと思います。その意味で、今日の対談を企画された方を含めて是非この提案を生かしてほしいと思います。ちなみに『ヒカルの碁』は私の知り合いの塩屋俊監督が映画化するということで、今着手しようとしています。それが完成した時には、こういう重々しい映画と是非比較してほしいなと思います。

塩川：坂和先生、ちょっと自分で映画評論的であってもいいからそれを紹介するという意味で新聞社に言ってみればどうですか。新聞社だって娯楽欄というか、文化欄にバラエティを求めていますから、やってくれると思いますよ。私も下手なものをちょいちょい出してるんです。ついこの前も後藤新平について書きました。これなんかでも非常にみんな興味をもってるんですね。後藤新平なんて知らんやろなと思っていたら、案外みんな知ってるんです。ですから、呉清源とか橋本宇太郎なんか聞いたことあるって言う人がずいぶんあるんですね。そういうことで、どうぞお願いします。

坂和：是非一度企画したいと思いますので、ご協力していただける方はよろしくお願いします。ちなみに、この舞台に飾ってある呉清源を演じた俳優さんのお名前をご存知の方いらっしゃいますか。おー、さすが３列目の人はご存知ですね。彼は中国の俳優ではない、台湾の人で、張震（チャン・チェン）さんといいます。本当に静かな、静かなそして凛とした、たたずまいでした。こういうすばらしい演技をできる人がいるんですね。もちろんこの映画で呉清源を日本人俳優がやることはないと思いますが、先生、この俳優さんを観てどう思いはりました？

塩川：そうですね。言葉がやっぱり、日本人でない言葉がありました。ちょっと外国人だなという感じがしますが、セリフうまいですね。それから、演技で巧いなと思ったのは、首を吊る前のウロウロするところ。あそこは本当に迷い込んでいる感じがよく出ているね。このシーンはよくできていると思います。すばらしい俳優ですね。

坂和：田壮壮監督が彼を一目見て、絶対お前じゃないとあかん、他の俳優は考えられなかったということで彼を起用したらしいですね。先生からみて、それ以外の日本人の俳優はどうですか。奥さんになった伊藤歩ちゃんもかわいいし、ちょっと恐い璽宇の教祖さま、南果歩さんもかなりの熱演だったですね。

塩川：やっぱり美人はね、現代的な美人よりも、日本型の美人が好きですね。懐かしいタイプの美人がいいですね。

坂和：やっぱりそういう方面には目がしっかり（笑）。先生、松坂慶子さんはいかがでしたか。

塩川：やっぱり貫禄がありますな。

坂和：あっ、それは誉めていただいてるんでしょうか？昔は松坂慶子さんといえばものすごい美人でしたが、失礼ながら最近はちょっと衰えが見えるかなと思いましたけど・・・（笑）。吉永小百合さんは今度松竹映画の『母べえ』の中で６０数歳の役で出演しますが、吉永小百合さんには松坂慶子さんの色香はないですね・・・。囲碁の世界で女流棋士がああいう風に活躍していたということを私たちは知らなかったから、やっぱりすごいもんやなと・・・。

塩川：最近女流棋士が少し増えてきた。そのためか、大学生で棋士を志すという人が出現しています。大学のサークルでも女流棋士が養成されています。そこでわりと女の人が大学のクラブ活動からプロの世界に入ってきてますね。

坂和：この映画の後半は、璽宇への信仰と自分の囲碁の世界との両立が大きなテーマになっていましたが、最初の段階、日本が日中戦争に入っていくという段階で呉清源が一番悩んだのが帰化の問題ですよね。日本が中国と戦争を始めたら、お前どうすんねんと。日本に帰化する気があるかという問いかけがなされます。そこで彼はもちろん非常に悩んだわけです。そういう時代を私は全然知りませんが、戦前に中国から日本に渡ってきた人たちがどれだけ苦労したかは十分想像できます。その中で呉清源さんが帰化という選択をするについて、どんな心の揺れがあったのかというあたりを、先生はどんな風にお考えでしょうか。

塩川：私は学生時代でしたから、あまり関係はなかったけど、私らの同級生の中にもやっぱりそういう人がおりました。台湾とか朝鮮半島の人がいました。ここらの人たちは「創氏改名」といって、みんな日本名をつけたんですね。君らも留学生だから、帰化して日本名をつけたらどうかって言われてましたね。しかし、やっぱり親元が許さなかったんじゃないかな。呉清源の場合は碁に打ち込みたいというのがあって、帰化の道を選んだのだと思います。それからあの徴兵検査。徴兵検査は私も受けましたが、あのとおりですね。

坂和：帰化を選択するについての彼の心の葛藤はいろいろありますよね。家族が中国に戻るという選択をしている中で・・・。

塩川：それはよく決心しているなと思いましたね。

坂和：日本人の俳優では、柄本明さんがやった呉清源のお師匠さんである瀬越ですね。自分が才能を見出した少年呉清源が囲碁を辞めると言ったら憤然と彼を叱りつけた。そのお師匠さんが１９７２年に亡くなったという字幕が出ましたが、あそこは何があったんでしょうね。

塩川：瀬越は棋士というだけじゃなくて、人間そのものがしっかりできあがっておった。そういう感じがしますね。ですから、あんまりものを言わないけれど、きちっとした指導をしておられたんですね。あのにわふみ（？）のところでバーンと怒りましたね。あれはすごかったよね。あれだけの喝を入れると現実に変わってくるんですからね、大したもんだと思いますね。

坂和：ふだんあれだけ静かな人だったのに、ここが呉清源の人生の最大のピンチだということで怒鳴ったんですからね。ちなみに、塩川先生が小泉改革を引っ張ったということは先程ご紹介しましたが、何でも昔は「瞬間湯沸器」と言われていたと・・・。

塩川：はっはっは。そうですね。

坂和：そうですか。今日ご参加の皆さんは塩爺のイメージしかなく、先生が昔瞬間湯沸器と言われていたことはご存じないと思いますが。

塩川：私はものがはっきりしないとイヤなたちでね。わりとイラチですね。そこらでグズグズ言っていると、はっきりせいと怒ったりもしました。それでよく言われますけど、乱暴な意味の瞬間湯沸器ではないです。

坂和：今の若い政治家の中にはわりとはっきり言う人もいるけれど、まあ数少ない。中堅どころにしても、６０代の政治家にしても、なかなかものごとをはっきり言わない政治家が多いと思うんですね。そういう意味で、塩川先生が瞬間湯沸器といわれながらも、ものごとをはっきり言うという姿勢はすごく大切なことだと私は思うんです。そういう政治家としての生きザマを皆さんどう思われるでしょうか・・・。

塩川：これはやっぱり育ってきた世界の違いですね。私らの世代は戦前ですから、そういうことには厳しくて、グズグズしていたら怒られるし、姿勢もピシッとしてないと。グジュグジュしとったら怒られましたね。そういう風に自然に人間の教育の形というのができてしまってるんですね。ですから、そこらを直していくのは容易なことではないだろうと思います。

坂和：話は変わりますが、私が最近感心して読んだ本に『日本映画、崩壊―邦画バブルはこうして終わる』という本があります。去年から、洋画に比べて日本の映画の調子がいい。売り上げも洋画を少し超えているということです。ところが実はこれは、テレビ局とタイアップして大量宣伝している映画が広まっているだけ。本当にこだわった名作は単館の映画館でしか上映されずなかなか広まらない。今日上映会をやった「シネマート心斎橋」という映画館もこだわりの映画館のひとつですが、そういう日本映画の現状をいろいろ考えると、『呉清源』のような映画を上映していくこと自体が大変だと思います。そこで私としては日本映画のこれからのあり方と教育のあり方は共通すると思うんですが、そこらあたりについていかがですか？

塩川：最近、映画の観客が増えたんじゃないですかね。東京で私がよく行くのは品川プリンスホテルです。あそこに行きましたら９つ映画館があります。夜遅くにちょっと行ったら２４時間やっています。ああいうので映画に親しみをもつんじゃないですかね。

坂和：シネコン、シネマコンプレックスですね。

塩川：それからもうひとつは、テレビのドラマに飽きてきたんじゃないか。テレビドラマは決まってますもん。探偵モノ、警察モノ、それかだらだらの恋愛モノ。そうでなければ、あほみたいな話のワイドショーでしょ。それで、みんな嫌がってきたんじゃないかと思いますね。そこで、多少メンタリーなものを望むようになってきた。そのことを私が顕著に感じましたことが最近ありました。学習院女子大学というのがあります。戸山キャンパスは新宿にあるんですね。そこの女子学生と映画の話をちょっとしました。そこで彼女が蒙古の映画で『白い馬の季節』を先生是非一回観なさいと言うんです。どこでやってるのかと聞けば、岩波ホールなんですね。そこで私も観にいったんです。支配人は、「お客さんは観てくれないんです、来てくれないんですよ」と言っていました。しかし、ああいう映画が学生の間で観られているというのは、映画を観る観客が変わってきたということですね。私も２０歳前の女子学生に「何が良かった」と聞きました。するとその答えは「親子の愛情がものすごい良かった」ということでした。私も映画を観てなるほどと感じました。これからはそういうものが求められてくるんじゃないでしょうか。

坂和：今言われた『白い馬の季節』というのは、モンゴルの映画です。遊牧民は馬がないと生きていくことができない、都会では生きていくことができないという不器用な男がおります。中国も公害問題で大変ですが、モンゴルも草がなくなり、草原がなくなっているという大変な状況です。すると、みんな街に出て働き給料をもらって生きていくしかない。しかし、草原で生きてきた不器用なお父さんは、俺は絶対に放牧生活しかできないんだと言って時代にとり残されていく。そんなモンゴルの今の時代を描いている映画ですね。現実に生きていこうとする奥さんとの確執と変化していく時代との葛藤、そういうものが描かれている非常に面白いというか、問題提起をする映画ですが、実はなかなかそういう映画が広がっていかない。たまたま若い女子学生がそういう映画を知っているというのはすばらしいことですが、岩波ホールですらなかなか人が入らないというのが現状なんですね。

塩川：岩波ホールの支配人は、他でやってくれないからうちでやってくれと頼まれたそうです。外務省かな。しかし私は本当にすばらしい映画だと思いましたね。たった５人か６人の俳優だけで終始一貫されています。９０分くらいの映画でしたかね。

坂和：ぼちぼち時間も迫ってきましたが、もうひとつだけ。この映画の衣装担当は、ワダエミさんという世界にはばたいている日本人女性です。中国映画の『ＨＥＲＯ』や『ＬＯＶＥＲＳ』というハリウッド型のど派手な色彩感覚の映画で世界的に有名になったワダエミさんが、この映画の衣装を担当しています。『呉清源　最後の棋譜』はちょっと地味な映画ですし、私の目にはこの和服は何がどうやということがなかなかわからないんですが、先生の年代であれば、和服の何とかとか、そういう点はどの程度注目しているんでしょうか？

塩川：おそらくですね、瀬越さんがずっと着ていたのはつむぎですね。しっかりした。呉清源の衣装は何かわからんけど、ふつうは大島なんかを着るのが多いんじゃないですかね。しかし、きちっと袴を履いていますね。対局の時でも礼をきちっとして、礼に始まり礼に終わるという感じ。これが大切ですね。これがやっぱり日本文化なんですよ。ところが、柔道は日本の古代の文化でありながら、オリンピックにしてしまった。無茶苦茶ですよ。碁は世界各国に広がっていますが、漢字の国が中心ですからね、儒教的なんですね。ここらへんがいいところですね。だから、共通の感覚でリーグ戦ができるんです。国際交流のためにも役立ってもらいたいところですね。

坂和：最後の行きつくところはやっぱり、こういうすばらしい人の生きザマ、闘いぶりをきちっと学んで、私たちが次の世代に伝えていかなければダメだということだろうと思います。今日参加された皆さんも、この映画から学ぶべきものはしっかりと学んでいただきたい。それから、短い時間でしたけど、１９２１年に生まれて８６年間生きてきた中で囲碁の世界、政治の世界で学んだ塩川先生のお話をじっくりと味わってもらいたいと思います。最後にひと言、これだけは言っておきたいというものがあれば、是非お願いします。

塩川：私はやっぱり、囲碁にしても将棋にしても文化と思って大切にせないかんと思います。ただのゲームにしてはいかん。ですから礼節だとか友愛、それと並行して碁を楽しんでほしいと思います。

坂和：「囲碁はゲームではなくて、礼節だ」ということを胸に刻んでいただいて、本日の対談を終わりにしたいと思います。塩川先生、今日はどうもありがとうございました。（拍手）

司会：どうもありがとうございました（拍手）。なお、売店にて岩波書店から出ております『呉清源　その生涯』とパンフレット（６００円）もお買い求めください。

以　上